キズナエピソード

及川依子　3話

//背景：黒

//ヴィジュアルノベル形式開始

初めて依子の愚痴を聞いたあの日から、

俺と依子は何度かこっそり会うようになった。

彼女の愚痴話を聞いていくたびに

俺は彼女のことをより深く知ることが出来た。

//次ページ

最初はちょっと引いてしまった彼女の厳しさや激しさも、

自分に対してのまっすぐな向上心から来るものだと理解できた。

目標を掲げ、そこに向かって着実に前進していく。

その姿は、俺の目には輝かしく映る。

俺にできることがあったら、手伝ってやりたい。

//次ページ

嬉しいことに、彼女の方も俺と一緒にいることを

どこか心地よく感じている素振りだった。

「こっちに来てから、本音で話せた友達はとびおだけ」

いつだったか依子は、そう言ってくれた。

愚痴を聞くくらいのことで彼女の力になれるのなら、

百どころか千の愚痴だって聞いてやる。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//人気のない公園・夜

［とびお］

そして、今日も俺は彼女の愚痴を聞くために、

いつもの公園を訪れていた。

［依子］

「――って感じなの。信じられる？

だったら、最初からかばちたれなきゃいいのに！」

［とびお］

ブランコでゆらゆら揺れながら、依子は愚痴をこぼす。

俺は適度になだめつつも

いつものように彼女の話を聞いていた。

［とびお］

しばらくして、一通り愚痴を吐き尽くしたのか、

依子はすっきりとした顔でブランコを漕ぎ始める。

［依子］

「あー、とびおと話してるとやっぱ楽しいわぁ。

うん、スッキリした！」

［依子］

「……ねぇ、とびおもなんか愚痴言ってよ」

［とびお］

「え、なんで？」

［依子］

「いつもイコだけ愚痴こぼして……不公平でしょ。

とびおも、なんでもいいから愚痴言ってよ。

悩みとかでもいいよ。イコが相談に乗ってあげる」

［とびお］

「え、えぇ～。

急にそんなこと言われてもなぁ……」

［依子］

「言いなよー。言わないとアイドルイデオロギーで……

握り潰す！」

［とびお］

「ど、どこを……!?

それじゃあ……俺の友達の話でもいい？」

「依子］

「んー、まぁいっか。聞かせて？」

「とびお］

「俺の友達にはさ、気になる子がいるらしいんだ。

その気になる子ってのが、夢に燃えていて、

誰よりも自分に厳しい子なんだって」

［とびお］

「友達はその子に何かしてあげたいって

思っているんだけど、愚痴を聞いてあげることしか

出来なくて……不甲斐ない自分をいつも悔しく思っ――」

［依子］

「ちょっとストップ」

［とびお］

「はい？］

［依子］

「キミ、今の話、友達の話って言ってたけど、

それどう考えても、イコととびおの話じゃん！

本人の前で、なに恥ずかしいこと言ってんの!?」

［とびお］

「ええ……

恥ずかしいからぼかしたのに……気づくなよ」

［依子］

「気づくわ、バカ！」

［依子］

「……それで、さっきの話は本当のことなの？」

［とびお］

「本当のことだよ。

依子に何かしてあげたいって、ずっと思ってる」

［依子］

「違う。そこじゃない。

その……とびおが、うちのことが気になってるって。

そう言ったよね」

［とびお］

「……え？

あー、ま、まあその、えーっと……」

［依子］

「なになに？　その様子だと本当のことなの？

そうかぁ……ふーん、そうかぁ……えへへ」

［とびお］

「いやいや、わかってるよ。依子はアイドルだからさ。

俺なんかが気になってるって言っても、

ファンレターとかで俺よりすごい――」

［依子］

「やかましいんじゃ、黙っとけぇや！」

［とびお］

依子がオレの目の前に立った。

次の瞬間、言い訳をする俺の口は依子の唇で塞がれる。

しばらくして、依子の顔が離れていった。

［とびお］

……え？　今のは……キス？

［依子］

「ワレはごちゃごちゃ考えんでえぇ。

ウチの側にいるだけでええんじゃけぇ」

［依子］

「……ずぅーと離れんなや」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

依子は力強く笑いながらも、その耳は真っ赤に染まっていた。

それは、俺の不意の告白に対する返事でもあった。

思考がようやく事態を認識したとき、

俺は嬉しさのあまり飛び跳ねていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//◆18禁版の場合、Rシーンに移行

//3話終了